日本カレドニア学会の夕

——ロバート・バーンズの「友情」について——

富田光行

「学会」(a learned society, eine wissenschatliche Gesellschaft)とは英語にせよ，独語にせよ，学問上の発表・交換を目的とする組織団体であることを意味するが，然し，学者なり研究者なりが，その研究途上に副産物として派生した問題を提出して，自他共にその問題たる問題を究明するといふこともあつてよいのではないかとも思はれる。従つて，「学会」はまたギリシア語からのままを使つて，academy とも言はれてゐる。academy は Ἀκαδήμειᾶ（アカデーマイア）から借用されたものであるが，アカデーマイア自体は本来，アテネの郊外にあつた林中の建物を指すが，プラトーンがここで，その学弟を前にし，静かにイデアを想ひつつ純理を論講したことから，その一党をもアカデーマイアと称するに至り，つひにはそれが「学会」を意味して今日に及んでゐる。然し，学会の本質はやはり society またはGesellschaft であつて，community でも Gemeinschaft とも呼ばれないところに，何か割り切れないものが感ぜられる。ところで，「学会」が事実上，community とか Gemeinschaft とか呼ばれるやうになつたら，その結果はどうなるであらうか。そこには，単なる語学上の問題をばかりでなく，志向上・組織上の問題をも，提起することになるのではないだらうか。これについては，思索の完成・時間の余裕を俟つて，斯界の検討を仰ぎたいと思ふ。

私に与へられた紙面を以て，「カレドニア学会の夕」といふ名目の下に筆を取つたのは，「学会」本来の面目とは，いささか毛色を異にするかも知れないためである。何故ならば，私の場合は，別に新発見・新研究といふものではなく，また研究途上の副産物を提起するといふことでもなく，自分のささやかな研究の経緯を発表するに過ぎないし，また同好の士（like-minded persons）に何らかの「つながり」が出来ればといふ程度にし，要は「肩の凝る夕」にしたくないといふ気持で臨むことに決めた。

事の起りを言へば，ヒョンなことから，本学の山崎金造先生から，スコットランドの詩聖ロバート・バーンズについては世界的な研究家難波利夫先生（日本大学教授であられ，今度，国際バーンズ協会会長 the President of World Burns Federation に就任された）にご紹介をいただき，それからカレドニア学会の会員として，その末席（文字通り）を汚すことになつたのが，昭和56年11月15日であつた。

さて，カレドニア学会なるものについて，その名称を二・三年前に，これまた本学の三輪先生からお聞きしておいたと記憶するが，まあ私はそれほどに田舎者であるが，そのカレドニア学会といふ名称が気に入つてしまつた。

カレドニアとはN.E.D.のC：p.28によると，「北部ブリトンの一部に関するローマ名で，現在では，スコットランドまたはスコットランド高地に当てはめて，詩的にまたは修辞的に用いられてゐる」(Calēdonia, Roman name of part of northern Britain, in modern times applied poetically or rhetorically to Scotland, or the Scottish Highlands) とある。この名辞は我々日本人にとつても，何となく幻想的・古典的・追慕的な感銘を与へてくれるものである。

日本カレドニア学会は，今年で創立二十五年になり，現在では，その本部が早稲田大学理工学部東浦研究室にあり，その会員は旧新凡そ45名で，他会・他団のそれと比較したら，少い方だと思ふが，多い方だとも言ふ人がある。まあ，その数はさて置き，受ける印象は地味・健実・友好といつたところである。

さて，その名称が示すやうに，スコットランド

の文学を主軸として，その歴史・文物・習慣・風俗等にわたつて，その研究テーマは全体として，スコティッシュである。それだけに，入口は狭く，奥行は広いといふべきか。それに，学会の大御所達はすべて，スコットランドを幾度となく，足を泣かせての実地探査・資料蒐集・文献検討などと手の混んだ方々で，市販の紹会物で満足しているのとはちがふ。

昭和57年5月9日附で，私はカレドニア学会本部から6月19日（土）に，ロバート・バーンズ関係の話をしろとの要請があつて，全く面喰らつてしまつた。何故ならば，バーンズについては，その研究を志してから，具体的には，二十年そこそこ，ハッキリ筆を執り始めてから五・六年にしかならない上に，それら大御所の前で，この田舎住人・一年生が，どんな名義でにせよ，「話をすること」は「カレドニア学会の夕」の埋草に過ぎないので，速刻お断りしようと思つたが，推薦者が例の難波先生であつてみれば，さうも行かないので，入会後，一年にならぬのにお引き受けをしたのである。

いよいよ新緑かをる都の西北（今は？）・早稲田大学の大隈会館に，「カレドニア学会の夕」を持つことになつた。ケット姿の田園詩人バーンズが絢爛華麗なるエヂンバラの夜会に臨む立場に相通ずるものを私は少し感ずるところがあつた。

私が掲げた題目は「ロバート・バーンズの友情——昔に，そして今に」といふのであつた。「昔に」では，バーンズの詩に於ては，「友情」がその主軸となつて，彼を詩聖たらしむるに至つた過去に戻り，「今に」では，近くわが周辺の者達・旧友・学友・会友・凡そ「友情」の名に値する者達間にその実践を望むといふ気持を述べる間に，バーンズ誕生二百二十年祭に当つて，彼の「生涯と詩想と」に関する拙著 Robert Burns：His Life and His Thoughts（これは，内外で，感動して下さつた方が少しくあつた）の発刊経緯を述べることも加味されてゐた。午後5時半から40分にわたつての談話は次の如くであつた。

*

私は，唯今ご紹介をいただきました富田光行と申すものでございます。私は測らずも今回の談話をするようにと，会長東浦先生・顧問難波先生・幹事曽我先生などから，大命が降下され，実にビックリいたしました。といふのは，私がこの名誉あるカレドニア学会に入会を許されましたのは，つひ昨年の暮あたりで，まだ半年ほど経つてゐるに過ぎません。また，それに，私は「バーンズ研究」などといつても，ほんの初学者であるに過ぎません。さういふ私がこの講壇に立つといふことは，本会のために，どうかと思はれますが，折角のご指名故，何とか大任の一部を果したいと存じます。

さて，私は長野市の南凡そ20マイル，軽井沢の北西凡そ80マイルの農村で，1905年に生れました。私より15歳年上の従兄に英語の好きな青年があつて，この従兄から片言（half-babbling）の英語を聞いて，英語に興味をもつようになつたのであります。

1912年（7歳の年）3月28日，この日，私達の小学校で，児童の卒業式が行はれたのであります。静まりかへつた講堂で，私達は先生達や村人達やに囲まれて，いよいよ，日本版「蛍の光」をそれのメロディーが誰の作つたものかも知らずに，小さな口を開き，歌い出したのであるが，あの崇高にして感傷的なメロディーに感極つて，いつしか目には涙をたたへて，去り行く卒業生を送り出したのであります。知らぬこととはいひながら，これがバーンズに近ずく第一歩といへたでありましようか。

それから数へて，約10年，私が16歳のころ，明治の文豪高山樗牛が書いた「たそがれの辞」（Ode to Evening）といふ題目が私の眼にとびこんで来たのであります。その第一行は次のやうに走つているのでありました。

「吾れ，バーンズが詩を読み，「天上のメリーに」と題する一篇に到る毎に，未だ曽て巻を掩ふて哀哭せずんばあらざるなり。……」（Every time I read Burns's poems and come to the piece titled 'To Mary in Heaven', I have never closed the book without weeping loud.）

然し，16歳の少年は，この一篇に，「情」（emotion）に於ては，燃え始めながらも，「知」

(intellect) に於ては，尚まだ「くすぶり」(smolder) の状態にあつたのです。

それから，またバーンズは，私の意識から静かに消え去つて，実に凡そ40年，当時私は自分の郷里に近い高校で，あのポピュラーな民謡「アンニー・ローリー」(Annie Laurie) を生徒達に教へてゐたのでありますが，私はこの甘く美しい歌詞と歌曲とに，心を惹かれて，彼女の史実 (historicitiy) を是非知りたいと思つて，1958年5月31日に Maxwelton の町長宛に史料を求める手紙を送つたのでありますが，50日ほどして Dumfries の市長 G. J. McDowall 閣下から，親切な手紙に添へて，博物館長 A. E. Truckell 博士の調査による史料を送つて下さつたのであります。この時の感激はまさに筆舌に表はせないほどでありました。と同時に，私が誤つて抱いてゐたスコットランド人に対する偏見が雪に熱湯の如く消え去つてしまつたのであります。そこで，私は感激の手紙に自己紹介的なものを書き添へて送つたところ，それが直に，かの地の新聞 Dumfries And Galloway Standard に載せられ，可成のセンセーションを起したらしいのであります。〔といふのは，後に述べるやうに，私の手紙をその新聞でよんだ Dumfries の若い退役軍人 (Retired Officer) Francis Kelly 氏(バーンズの礼讃者で，つねにその詩集を携帯していた) が，翌年 (1959年) 5月10日突然私を訪問したからであります。〕

それから，市長閣下に差し上げる手紙は一つ一つその新聞に載せられ，その年 (1958年) の暮に，市長閣下から，「来年はバーンズ誕生二百年になるから，Dumfries でも盛大な祝賀が行はれるので，それに参加されたい」といふ有難い招待状を頂戴したのでありますが，その時の状況甚だよくないので，年が改まつて，1月10日に，Dumfries の市民各位へ祝賀のメッセーヂを送つたところ，このメッセーヂもまたかの地の新聞 Dumfries And Galloway Standard に載り，私は参加不可能の残念さとメッセーヂを送つておいてよかつたことの満足さとで，複雑感情の Burns 誕生日を迎へ送つたのであります。

祝賀のメッセーヂとは，次の如きものであつた。ここでは，紙面の都合で，邦文のみを掲げることにいたしましよう。

私の最も親愛なるダムフリースの市民諸君！　私はかの美しくして永遠なる詩アンニー・ローリーの調査について，昨年博物館長 A. E. Truckell 氏と共に幾多の御親切を寄せられた諸君の又私の親愛なる市長 G. J. MacDowall 閣下を通じて，このメッセーヂを送ることに，非常な幸福を感ずるものであります。全世界が知るやうに，今年は恰度ロバート・バーンズの誕生二百年に当ります。さういふ訳で，私は貴国から遙かなる日本に住む英語の一日本人教師として，一言申し上げざるを得ません。

私が彼について，若干の事どもを知るやうになつたのは凡そ十六歳の年であります。然し，私はそれよりも十年以前，つまり六歳の年，彼によつて影響されてゐたのです。何故ならば，私はかのオールド・ラング・サイン (「蛍の光」の原歌) を，それが誰によつて作られたかを知らなかつたとはいへ，小学校で一年生の時，それを歌うことが出来たからです。私は今年五十三歳でありますが，それ故私の先生達，また若干の村人達に囲まれて，小学校の講堂で，卒業式にあたり，小さな口を開き，目には涙を湛へて，この類まれなる崇高にして感傷的な歌を初めてうたつたのは凡そ凡五十年以前のことでした。然し，私の最も親切なるダムフリースの市民諸君，私がかように印象的な初めての出来事に遭遇したのは，つひ昨日のことのやうに思はれるのです。それで，私は今，彼の誕生日と日本に於ける卒業式とがやがてやつて来るので，当時とまさに同じ感傷を以つて甚しく心動かされて，日々を過しています。

さて，彼の誕生二百年祭が，おお・ワンダフル！　諸君の市ダムフリースに於て行はれやうとしてゐることを，市長 G. J. McDowall 閣下から承り，私は非常にうれしく思います。彼 (ロバート・バーンズ) がかの荒涼たる冬の日，アロウェーの粘土造りの小屋で——おおこの一月二十五日に生れたことを知つている私はそれが他の如何なる場所に於てでもなく，おお，実に諸君の市ダムフリースに於て，

永遠の憩ひに移された彼の偉大にして然も安らふことなき生涯を瞑想せざるを得ないと共に，又彼の誕生日に対する類まれなる絢爛たる祝賀祭の故に，諸君に，深く高く感謝せざるを得ません。

世界が曽て見た中で，最も偉大なる詩人の一人ロバート・バーンズを生み出したところのスコットランドの国は幸であり，又彼にその永遠なる平和を与へたところのダムフリース市民諸君は幸である。もし，我々が心の中に二つの歌・アンニー・ローリーとオールド・ラング・サインとをさへもつているならば，他に如何なる歌を我々は求めましよう。この二つの歌は全世界いたるところで，老若・貧富・高低・男女を問はず，かくも大いに影響を与へてゐるので，我々日本人がそれらを忘れてゐる理由はないぢやありませんか。この永遠に記憶さるべき年祭に，私が諸君に参加するのも，このためであります。

今，日本では雪が降つて居ります。雪は二百年前に生れたこの最大なる詩人の人生に於ける最初の日を思ひ出させようと試みてゐるのかも知れません。私は思ふ，全人類の平和は唯単に政治上ののみならず，亦精神上の，つながりから出て来るのです。それから又私は諸民の祖国スコットランドが曽て演じたところの人類の理想に対する役割が非常に偉大であり，それ故に又大いに尊敬されざるを得ないものと信ずる次第であります。私の最も親愛なるダムフリース市民諸君並に一般にスコットランドの国民諸君！　他の如何なる国もなし得ない所を——即ち諸君が最大なる詩人を次々と生み出されるやうにと，望みつつ，この辺で私のペンを擱きます。

一九五九年一月一〇日

日本長野県稲荷山町

富　田　光　行

さて，このやうな祝賀のメッセーヂをダムフリースの市民各位に送つたところ，これも亦，かの地の新聞 Dumfries And Galloway Standard にのり，私は参加不可能なことの残念とメッセーヂを送つておいたことの満足との複合感情で，バーンズ誕生二百年祭を迎へ送つたのであります。

一月二十五日を中心とする一週間にわたつて行われる祭典に，市長 McDowall 閣下，博物館長 A. E. Truckell 博士など，それぞれ Burns に関して，演説をされたのでありますが，その様子は一々新聞 Dumfries And Galloway Standard の紙上に於て報告されましたが，実に絢爛たる（gorgeous な）祭典が繰り広げられたのであります。奇しき縁に結ばれた二百回目の誕生日に，祝賀のメッセーヂで参賀出来たことは幸ひでありました。

同じ1959年5月10日（日曜日），私の従兄（私より十五歳年上で，私に小さい時，片言の英語を教へてくれた人）を訪問しようかと思つて，まさに昼食の箸をとらうとした瞬間！その従兄が「スコットランドから，お客さんが……！」と，オドオドしながら，玄関に立つてゐる。私は，早速，飛び出してみると，一人の外人が街路に立つてゐる。然し，それが去る4月20日ごろ，横浜のグランド・ホテルから，手紙を私にくれておいた Francis Kelly 氏だと直感されたが，私の驚いたのは，全く何の結びつきもない従兄が，どうして Kelly 氏を私の家へつれて来たかといふことでありました。

それは，ともかく，私は思わず「Welcome home!」と言つてしまつて，彼を招き入れ，それから，いろいろと話してゐる中に，やつと謎めいた従兄と Kelly 氏との結びつきが判つたのでありますが，申すも実に喜劇的（comic）・活劇的（scenic）なストーリーがあつた訳ですけれども，それは省略いたします。

やがて，午后三時も過ぎる頃になつたので「私は Let's have a party. と言つて，ささやかな夕食を始めたのでありますが，私達は日本人対スコットランド人といふ対立意識（Oppornent sense）が殆どなく，民謡 Annie Laurie を初めとして，スコットランドの民謡を次々と歌ひ，最後に私達は円陣を作り，感激こめて，射し入る夕日を眺めながら，Auld

Lang Syneを声高らかに歌ふのでありました。今にして思へば，摂理（Providence）の手はいよいよ差しのべられて来てゐた訳でございます。バーンズを中心とする「友情」（friendship）が，かうしてKelly氏との間に於て，初まつたのであります。

それから，17年はいつの間にか過ぎ去つて，1976年の1月20日，朝5時半ごろ，目がさめると，今日は日本で「廿日正月」であること，そして今日から新な春が初まることが放送されてゐるのでありました。「今日は一月二十日！　さうすると，もう五日で，バーンズの誕生日がやつて来る。それでは，よし！　いよいよバーンズの勉強を始めよう。」と，漸くにして，決心がついたのであります。時に，私はすでに71歳にならうとしてゐるのでありました。

さて，私がバーンズの勉強を発心した理由は，これまで申し上げて来たやうに，バーンズを前にして，その背後に，私にとつては60年に余る摂理の導きがあつたことを加へて，二・三の理由があつたのです。

1．彼バーンズの一応は泥くさい（mud-smelling）生立と生涯とが，私の趣味に合つたことなのです。彼の先祖を探ねれば，遠く1000年の昔に溯れもします。そして，社会的にも，必ずしも下積みな階級ではなかつたのであります。彼らの中には，市長・陸軍大佐・作家・州長官代理（sheriff substitute）・町会議員等々があつたのですが，然しバーンズはこんなことに少しも関心なく，人に会ふ毎に，「わしの親爺は百姓でしてねえ」（My father is a farmer.）と言つて，通したのです。

バーンズは，文字通りに，土そのものから出て来て，そしてそれ故に，そのことが美と崇高な詩歌の無限なる可能性の温床ではなかつたか。然し，彼の短い三十七年の生涯はその一端をrevealしたに過ぎないでしよう。

2．彼がその詩歌を日毎の体験から作り出したといふことに，私は心を惹きつけられたのであります。シェークスピアは偉大，ワーズワースも偉大，ゲーテまた偉大。然し，これら偉大な詩人達の作品は，いはば「知性的」（intellectual）なもの，つまり詩を作るために，「詩を考へること」（thinking）の上に生まれたやうに，私には思はれるのです。だから，「知性」（intellect）に訴へる力があり，知性豊かな人には好かれるでしよう。そのやうにして咲き出した詩歌は非常に精練された花にも比すべきであるが，それは「造花」（artificial flower）の美に類する感じとなる。私は造花の美にはあまり動かされないのです。

然るに，バーンズの詩歌は「感ずること」（feeling）によつて，作り出されたやうに見うけられる。それはthinkingを無視することではなくして，それを「止揚すること」（sublating—aufheben）でありましよう。

彼の詩歌は「妥協」（compromise）も「ごまかし」（deception）も許さぬ野良仕事（field work）の汗と埃とから生れたものだと，私は思ふのです。「今日は，詩でも書かうかなあ」などと思ひ立ち，ゆつたりと足軽やかに，詩材を探し歩くとか，香りの高いコーヒーを啜りながら，時には朝から高価なウィスキーを乾しながら，詩歌を「考へる」有閑な（leisured）詩人とは，ちがつてゐるバーンズでした。

勤勉な一日の労働をした後に，グッタリ（dog-tired）と身を家に転ばしこんで，物を言はずに，一気呵成（at a stretch）に筆を走らせたのであります。彼の詩歌は，花にたとへるならば，大地の中から咲き出た自然な花——素朴で，純粋で，その故に，いつまでも飽きない真実の美を感じさせるやうな気がするのです。

3．さういふ訳で，バーンズは自然を愛する詩人であり，「自然」の子であつたと思はれて，そこに，私は心を惹かれたのです。彼が叙事詩人（epical）であるとか，叙情詩人（lyrical）であるとか，決めつけるのは，どうか。彼は野鼠・雛菊・林・川・丘・鳥・羊あたりに見られる殆どすべての様相が，そのテーマになつてゐた。然し，彼はそれらをそのままに歌ひ綴るだけでなく，その一つ一つに人間を投影（project）して，そこに人間と自然との融合を見るバーンズであつたと私は思ふので

す。彼は一体二面(one body with two sides)の詩人であつたといふべきではないでしようか。

4．ここまでのやうに申し上げるとバーンズはまことに，innocent で saintlike な詩人のやうに聞えて来る。然し，果して如何か。

最初の詩集 Kilmarnock Edition(1786年7月31日）が出版され，これが遠くエヂンバラの上流社交界を惹きつけ，1786年11月27日(日曜日）の夜，歓迎会に臨むと，かの紳士淑女達は，彼の詩歌朗読に酔はされたばかりではなく，彼の風貌・対話・物腰に，高級淑女達は，いやといふほど悩殺されてしまつたが，この光栄を，かの少年 Walter Scott がつぶさに覚えておいたことはその後日譚が物語るところであります。彼には，身心共に悪魔的(devilish)な魅力があつて，この魅力が実は紅顔可憐な15歳の少年からその死に至る37歳の青年までの22年間「相手は14歳の少女から夫ある淑女に至るまで，その詩材となる女性だけでも，50名に上る，いはば立派なドン・ファン（Don Juan＝libertine）でもあつた。然るに，また面白いことには，彼が愛し彼が捨てた女性で，彼を一度は憎んだが，結局彼の上に祝福を祈りつつ，去つて行つたのであります。

私達は，とかく「大物」を美化（beautify）したり，時には神化（deify）したり，しがちであります。然し，これは厳に慎まねばならないことでありましよう。バーンズについても，このことを十分に警戒せねばならないと思ひます。さうすることは，彼に対して，冷胆になることではないでしよう。

彼は，「私に於ては，「恋心」（Love）と「歌心」（Poesie）とが同時に発生したのです」と告白してゐたのが，後に，Love in the Guise of Friendship.（友情を擬装した愛）の第一節に於て，Talk not of love, it gives me pain, For love has been my foe.（恋のことは言はないでくれ。苦しいんだ。なぜつて，恋はこれまで僕の仇だつたんだ」とアッサリ変心したやうな言ひ方をしてゐるのです。

5．さて，このバーンズがその Love in the Guise of Friendship（友情を擬装した愛）の第二節に於て，But friendship is pure and lasting joys（然し，友情は純粋にして永久的な歓喜である）と絶叫してゐるのです。

1788年（29歳）秋も半となつたころ，Ellisland の農場で，疲れた体を乾草の上にのせ，青空の下，去来する雲の千切を眺めながら，幼き日よりの友また友を思ひ浮べ，感情こめて作つたあの Auld Lang Syne はその歌詞といひ，その歌曲といひ，崇高にして感傷，甘美にして純情，まさに「友情の詩人」に相応はしい詩歌となつて生まれたのであります。この Auld Lang Syne はバーンズの Originality を否定する人もあるが，結局彼の完成したものと考へてよいでありましよう。

さて，バーンズのスコットランド文学，ひいてはイギリス文学に及ぼした過去の歴史は，言ふまでもなく，多大なるものがあります。1800年に入つた或る日のこと，文学の旅をつづけてゐる二人の見知らぬ男達がたまたま Alloway Bridge にやつて来，とある家に立ち寄り，バーンズについての何か研究資料をたづね，そしてそれから，年長者の方がバーンズの詩を一つ声高からかに読むのを許してくれと頼むのでした。それから彼は甚だ関心の大なる一篇を取り出した。それは To Mary in Heaven であつた。彼はそれをおごそかに読んだり吟んだりしたのであるが，それを聞いてゐた人々はみな感極まつて，どつと泣き出してしまつた。そこで Begg 夫人は彼の氏名を知りたいと熱望したが，「彼は匿名で旅をしたがつてゐるのですよ」と年少者の方が言つた。然し，いよいよ立ち去らうといふ時になると，その朗読者は老夫人の手を取つて，「Begg さん，私は故あつて，或る場合，匿名で旅をするのですよ。それでも，あなたは少くとも二・三日間この辺で私の氏名が判らないままにしておいていただけると思ひます。不朽なる Burns の妹さんに，今，私はよろこんで，自分の名前を打ち明けることにいたしましよう――Alfred Tennyson ですつて。」

バーンズに於ける「友情の讃歌」Auld Lang Syneは遙かに遠くアメリカにまで及び，彼の作品に感動した少年Whittier（J. G.：1807-92）はあのやうにまた優れた詩人となつたのであります。バーンズが生れて，やがて223年，そして，彼が讃へて歌つた「友情」は昔に今に，否後々まで，唯単に口で歌はれるばかりではなくして，また心でも歌はれ，人間のあるところ，友情を必要とする限り，必ずや，声高らかに歌ひつづけられ，ミューズの衣を肩にかけたバーンズは不滅の詩人として語られることでありましよう。

これにて，私の談話を終りといたします。このカレドニア学会の一層発展あらんことを祈ります。ご静聴ありがとうございました。

＊　＊　＊

すでに，あたりは夕闇に包まれ，夕嚮の時間に移つて行つた。一流学者達との歓談を恵まれること——凡そ一時間，8時にもなつてゐた。いよいよ閉会解散することになつた。そこで，私が持つて来てゐたAuld Lang Syneのプリントで，すでに会員各位にお届けしてあつたものを開いて，人もあらうに新参者の私が音頭を取るやうに指名されたので，熱誠こめて声高らかに歌ひ出したのである。それで，幸ひにも，省略することもなく，最後まで，歌ひつづけることが出来た。私はこのことあるを予想して，携へ来たカセットに，この合唱を納めるのであつた。

「都の西北，早稲田の森」は次第に静まりかへつて行き，夜学生のためにか，白亜の学舎からも，漏れ出る電燈の光は薄れゆく暗いキャムパスを抜けて，三々五々，再会を契ひつつ，四散したのである。

日本カレドニア学会は年と共に栄え来て今日に至り，最近，当会の中から，驚く勿れ，Burnsの研究に関して，私達が畏敬して極まりなき難波利夫先生（日本大学教授）が世界最大級の名誉たるPresident of World Burns Federation（国際バーンズ協会会長）に就任されたのである。まことに歓喜の次第である。当会の発展と先生の栄進とを祈つて，この稿を終ることにする。

信濃路の千曲河畔・篠山の麓にて

1983年7月6日　富　田　光　行